



尾が長く伸びたアカウミガメの雄



人工衛星発信器を付けたアカウミガメ



第10回

⑩ 青春時代を三陸で  
過ごすウミガメの話

ウミガメというと、南日本の海岸に産卵が上がってくる動物で、岩手に住む自分たちには関係ないと皆さんは思うかもしれません。ところが、ウミガメと三陸沿岸には深い関係があります。私たちは2005年から大槌湾や船越湾の漁業関係者の協力の下、ウミガメ調査を行っています。毎年6月から7月、水温が15℃を超える頃になると、ポツリポツリとアカウミガメが定置網に入るようになります。私たちは、大槌湾・船越湾・山田湾に水揚げしている定置網漁業者にお願いして、港まで亀を持ってきてもらいます。8月のお盆過ぎになるとアオウミガメも捕れるようになります。毎年、夏の間には計50頭ほどを集めることができず、網に入らないウミガメも多いはずなので、数百頭くらいのウミガメが夏に三陸沿岸にやってきているのではないかと想像しています。

集めた亀は大槌町赤浜にある国際沿岸海洋研究センターの屋外水槽に入れ、数日から数週間飼育して糞を採集します。アカウミガメの糞の中からは貝殻の破片やカニの殻が、アオウミガメの場合は海藻や海草の塊が頻りに出てきます。時にはビニール袋やプラスチックの破片が出てきます。人の捨てたゴミをウミガメが食べてしまうのは問題ですが、そのせいで死ぬというものは無さそうです。木片や海鳥の羽なども出て



普通、アオウミガメの腹甲は真っ白ですが、中にはこのように黒っぽい個体があります。これはハワイないし東太平洋産の個体であることがDNA分析から判明しています。クロウミガメという別種にするべきであるという意見もあります。

くることから、ウミガメは消化できないものはそのまま排泄しているようです。アカウミガメの背中にビデオカメラを付けて海に放したところ、1日に数十ものクラゲを食べていることが分かりました。クラゲは消化しやすく糞にはなかなか出てこないの、ビデオカメラならではの発見でした。

ウミガメの雄を見分ける方法は簡単です。成長が進んで大人に近づくと、雄の尾が甲羅を大きくはみ出して伸びてきます。ただし、この方法で見分けることができるのはある程度大きくなってからで、小型個体の性別は外見だけでは分かりません。亀の年齢が分からないのも頭が痛いところです。見学者から「この亀は何歳ですか?」とか、「何年で大人になるのですか?」とか「寿命は何年くらいですか?」などと聞かれても、「分かりません」としか答えられないのです。

大槌湾周辺にやってくるアカウミガメの甲羅の長さを測ったところ、アカウミガメでは45センチから85センチの大きさの個体がいいて、70センチ台前半の個体が最も沢山いました。南日本の産卵場に上陸してくる雌成体は普通80センチ台、一番小さい記録と

して69センチというものがあるので、三陸にやってくる個体の少なくとも半分は大人になる前の青少年ということになります。アオウミガメでは40センチ台の個体が多く、これらもまた成熟する前の若い個体であるといえます。

鱸のりから少しだけ組織を採取してDNA分析したら、アカウミガメの多くは鹿児島県の屋久島産であることが分かりました。アオウミガメの多くは東京都小笠原諸島の生まれでしたが、ごく少数の個体はハワイないし東部太平洋からやって来たことがわかりました。卵から孵化した後、何年経って三陸まで辿り着いたのかはまだ分かりません。三陸で青春時代を過ごした後、何年後に性成熟に達して産卵場に上陸するのか、それを調べるために全ての個体に標識をつけ、その内数頭には人工衛星対応型発信器を付けて放流しています。産卵場周辺まで回遊していることは分かったのですが、まだ産卵上陸の報告はありません。私が定年退職するまであと18年間あります。それまでにどこかの産卵場から標識付きの個体が上陸したという報告が来るのを楽しみに、これからもウミガメを放し続けたいと思っています。

きとう かつふみ  
佐藤 克文

1967年宮城県生まれ。専門は動物行動生態学。著書に「ペンギンもクジラも秒速2メートルで泳ぐ」(第24回講談社科学出版賞受賞)、「巨大翼竜は飛べたのか」、「サボリ上手な動物たち」がある。2004年から震災まで釜石市鶴住居町在住。